

# 近世後期尾張における農民的商品生産・流通と農間余業

——『尾張徇行記』をもとに——

岩 崎 公 弥

Kimiya IWASAKI

(地理学教室)

## 1 はじめに

江戸時代後期になると全国的に農民の商品生産が盛んとなり、自給自足的な農村生活はむしろ困難な状況が生まれつつあった。全国的にみれば商品生産は、地域的分業とともに各地の自然条件を生かした特産物生産とそれに目をつけ利潤を得ようとする藩権力によって支えられてその地域の基幹的産業と化していったものが少なくない。しかし地域的にみれば、農民的商品生産は地元の需要をまかなう比較的狭い範囲での市場圏のもとに展開されていた場合がほとんどである。もちろん商品によってはそれが全国的な商品の流通ルートに乗せられていく場合もあったが、大まかにみればその商品の多くは、野菜類や燃料など日常生活物資が中心であったと言えよう。本稿ではそのような農民的な商品生産とその流通の実態を、尾張藩領を事例として同藩の優れた地誌である『尾張徇行記<sup>(1)</sup>』をもとにしつつ明らかにしたい。

## 2 資料と分析方法

『尾張徇行記』(以下『徇行記』と略する)は尾張藩士樋口好古によって編まれた村別地誌である。編纂時期は18世紀末から19世紀初期に当たるので、記載内容も1800年前後の状況を伝えていると考えられる。現在発見されている『徇行記』は、葉栗郡の全域と中島郡の一部(北部及び西部)さらに知多郡の一部(北西部)について該当する巻が未発見となっている。本稿ではこの『徇行記』の村別記事の中から、その村の特産品やその販売先さらにその村の主たる生業や出稼ぎ先などについて抜き出した。それを示したのが、第1表である。記載内容には村毎あるいは郡毎に多少の精粗があり、村によっては必ずしも特産品とは言えない物も掲載されている。このうち主要な商品や農間余業に関して分布図を作成した。そうすることによって当該地域の農業や農村の性格を明らかに出来ると思われる。また流通状況を見ることによって各地の結節点としての中心地や一般的な農民の商品がどのような範囲で取り引きされるのかが解明されると思われる。地域によっては農民の出稼ぎ移動も見られたので、それらについても考察を加えたい。既存の研究としては梶川氏の一連の優れた研究<sup>(2)</sup>があるが、氏の研究は、郡・村を単位とした研究であるので、本稿では、郡域を越えたより広い商品生産の広がりや商品流通の様子を見ることに主眼を置きたい。

第1表 『尾張徇行記』にみる尾張諸村の特産品とその出荷及び農間稼一覧（その1）

図番号 村名	特産品(→：出荷先)及び農間稼または生業				
愛知 1. 御器所 2. 古井 3. 栄 4. 稲葉地 5. 上中 6. 牧野 7. 平野 8. 米野  9. 露橋 10. 北一色 11. 高須賀 12. 五女子  13. 四女子  14. 二女子  15. 牛立 16. 中野  17. 中野外新田  18. 八ツ屋  19. 丸米野  20. 本郷 21. 小塚 22. 荒子  23. 万町 24. 高島  25. 中郷  26. 八田  27. 烏森 28. 長良  29. 岩塚 30. 横井 31. 打出 32. 野田	沢庵漬、瓦・砲碌 蘭 藪、椶櫚箒、冶工 裏筵 畳表芫筵→祢宜町 藪、畳表→祢宜町 畳表・呉座→日置村・祢宜町 蘭 藪、畳表・芫筵 裏筵→祢宜町 南瓜・西瓜→下小田井市・尾頭橋 南瓜・西瓜→下小田井市・尾頭橋 南瓜→下小田井市、蘭→名古屋 南瓜類→尾頭橋 番南瓜・西瓜・東瓜→下小田井市・尾頭橋、藪 番南瓜・西瓜・東瓜類→知多郡、柿→津島・横須賀 小麦・菜瓜→下小田井市 裏筵→日置村、番南瓜・東瓜・西瓜・茄子類→下小田井市・尾頭橋 白瓜→下小田井市 白瓜、草花 裏筵、白瓜→下小田井市 芫筵 裏筵、白瓜→下小田井市、名古屋納屋裏辺より買出に來村 白瓜→下小田井市、柑類・夏菊・裏筵・槇皮繩 裏筵、東瓜→下小田井市 裏筵 藪、裏筵、錢差→名古屋 裏筵 裏筵 裏筵→祢宜町 裏筵、瓜→下小田井市	33. 中須 34. 下ノ一色  35. 東起  36. 法華寺  37. 中嶋新田 38. 戸部 39. 笠寺 40. 本地 41. 嶋田  42. 傍祢本 43. 沓掛 44. 鳴海 45. 本地  46. 菱野  47. 山口  48. 前熊 49. 米ノ木 50. 浅田  春日井郡 1. 中切 2. 名塚  3. 児玉 4. 上小田井 5. 中小田井 6. 下小田井  7. 下河原  8. 大野木 9. 比良 10. 久地野 11. 二子 12. 高田寺 13. 鹿田 14. 片場 15. 豊場 16. 松河戸 17. 川  18. 清須  19. 土器野新田 20. 寺野 21. 田中	小麦、裏筵→祢宜町 桃→名古屋・下小田井市 瓜・西瓜→下小田井市 裏筵→祢宜町、瓜・西瓜→下小田井市 裏筵 塩浜稼 塩浜稼 塩浜稼 芝・薪→名古屋、蓴菜→名古屋 木綿 西瓜 有松絞木綿 瀬戸物・炭・薪販売、桐木・古金買出し 草鞋草履→名古屋、瀬戸物→知多郡・三河・遠江 薪→名古屋、瀬戸物→知多郡 草鞋繩→名古屋 中馬稼 麦麵製造3戸  田麦 慈姑(クワイ)→下小田井市 藪 筵 芫筵 畳表・芫筵・虚無僧天蓋・編笠 笋・蔬菜→下小田井市、午莠→市 下筵 筵 筵 筵 筵 瓜・西瓜→市 筵 繩 田麦7歩植付 品野村の炭買出→名古屋 人參・茄子・青瓜・午莠・真桑瓜・西瓜類→下小田井市 綿実油挽(下小田井・枇杷島村付近へ) 大根・午莠→下小田井市 蔬菜類→下小田井市	22. 朝日 23. 中ノ郷 24. 落合  25. 宇福寺 26. 法成寺 27. 小幡 28. 大森  29. 印場  30. 新居 31. 稲葉 32. 瀬戸川  33. 狩宿  34. 今  35. 瀬戸 36. 赤津  37. 下品野  38. 中品野  39. 上品野  40. 白岩 41. 片草 42. 下半田川 43. 上志談味  44. 中志談味 45. 下志談味 46. 吉根  47. 関田  48. 高藏寺 49. 玉野 50. 外野原  51. 迫間  52. 白山 53. 和泉 54. 神屋	朝日柿・款芫(フキ)→下小田井市 大根 大根、薪、茄子、蔬菜→下小田井市 大根 大根 茶、蕎麦 大森草鞋→名古屋、赤津・瀬戸村陶器の駄賃稼 草鞋→名古屋、瀬戸物の駄賃稼→名古屋 瀬戸物駄賃稼 草鞋 草鞋→名古屋、瀬戸物駄賃稼 草鞋→名古屋、片草・白岩・品野付近から薪を買出→名古屋 赤津・瀬戸陶器・三州小原付近の炭の駄賃稼 陶土 山稼、駄賃稼、薪、柿 信州・名古屋間の荷物送 瀬戸物・薪・千端薪→名古屋、薪問屋あり 白炭・鍛治屋炭→名古屋(印場村・大森村の人により輸送) 、駄賃稼 薪→名古屋 薪→名古屋 薪→春日井原 草鞋・沓・柿→大曾根口、千端薪→名古屋(特定年のみ) 沓鞋 草履・草鞋 草履・草鞋→名古屋、杣稼 多治見焼・瀬戸物の中継地で駄賃稼 薪→小牧市 箕 抹香・柴薪・枯魚→中津川宿 薪→小牧市、駄賃稼(名古屋より枯魚塩を高山へ輸送) 薪→小牧市 置郵稼 大豆・甘藷

第1表 (その2)

55. 西尾	木綿・大豆	30. 宮後	苳, 大豆, 菅大臣綿	19. 北高井	木綿仲買→名古屋
56. 内津	茶→名古屋・松本	31. 木賀	苳, 大豆, 蚕飼, 繭	20. 南高井	木綿仲買
	薪, カナ木→春日井	32. 赤童子	蚕飼, 糸綿, 竹細工	21. 林野	木綿仲買, 繰綿→一宮
	原より買出に來村		(寛文中)	22. 妙興寺	木綿買, 繰綿商い, 大工木挽職
<b>丹羽郡</b>		33. 和田勝佐	茶, 桑, 蚕飼, 糸綿, 箕, 竹籠(寛文中)	<b>海東郡</b>	
1. 森本	繰綿→他方	34. 山尻	蚕飼, 繭	1. 鎌須加	大蘆葩(オオダイコン)
2. 丹羽	茶, 蚕飼, 米, 薪→濃州黒瀬湊(→河田村), 茶→稲葉宿	35. 南山名	茶, 桑, 雑穀, 大豆, 蚕養, 繭	2. 長須加	裏蒔
3. 五日市場	菜蔬, 西瓜・瓜(夏), 胡蘿蔔(ニンジン)	36. 北山名	蚕飼・糸綿・飼馬地(周辺10カ村)→名古屋	3. 助光	裏蒔
	(冬)→下小田井市	37. 斎藤	蚕養, 糸真綿, 竹籠細工(寛文中)	4. 伏屋	裏蒔, 繩
4. 九日市場	麦・木綿・芋, 菜園物→下小田井市, 茶	38. 高木	蚕養, 糸真綿	5. 前田	裏蒔→日置村・祢宜町
5. 花地	茶, 桑, 蚕飼	39. 下野	菅大臣綿, 薪→犬山	6. 榎津	裏蒔
6. 山王	茶, 桑	40. 上野	茶, 桑, 苳, 大豆	7. 江松	蒔
7. 石枕	茶, 桑	41. 下般若	茶, 桑, 蚕養, 繭	8. 戸田	戸田蘆菁(カブラ)
8. 北野	茶, 桑, 蚕養, 蚕	42. 中般若	茶, 桑, 苳, 大豆, 蚕養, 繭	9. 東福田新田	鰻
9. 前野	茶	43. 神尾入鹿	柴・薪→小牧市, 抹香→名古屋	10. 茶屋新田	鰻
10. 小口	茶	新田	山稼(神尾入鹿新田同様)	11. 土田	蔬菜・蘿蔔(ダイコン)・茄子→下小田井市
11. 柏森	茶, 桑→上有知, 茶・桑間に小麦・苳作	44. 奥入鹿新田	採薪	12. 上条	瓜・大蘆葩(オオダイコン)→下小田井市
12. 力長	蚕飼, 繭	45. 安楽寺	山稼	13. 今宿	蔬菜類→下小田井市, 茄子・瓜・西瓜・大蘆葩(オオダイコン)→下小田井市
13. 南小淵	木綿	46. 栗栖		14. 方領	大蘆葩(オオダイコン)・午券・茄子・瓜・西瓜→下小田井市
14. 柚木下風	木綿	<b>中島郡</b>		15. 石作	蔬菜・款苳(フキ)・大蘆葩(オオダイコン)・茄子・瓜・西瓜→下小田井市
15. 西大海道	苳・大豆	1. 日下部	野菜→下小田井市	16. 新居屋	大蘆葩(オオダイコン)
16. 定水寺	繰綿→一宮	2. 有松	蘿蔔(ダイコン)	17. 上萱津	瓜・西瓜・茄子→下小田井市
17. 熊代	茶, 桑, 蚕養, 糸真綿	3. 米屋	蘿蔔(ダイコン), 切干	18. 下萱津	茄子→下小田井市
18. 勝栗	苳・大豆	4. 坂田	薪・味噌類→出店売	19. 小路	大蘆葩(オオダイコン)・茄子類→下小田井市
19. 五明	蚕飼, 繭	5. 矢合	松杉苗→美濃・三河・伊勢	20. 古道	大蘆葩(オオダイコン), 田麦7分通り作付
20. 下奈良	桑, 茶, 蚕飼, 糸真綿	6. 平	千切千割干	21. 北苳	千切干→下小田井市
21. 中奈良	蚕養, 繭	7. 山口	千切干, 松杉苗	22. 乙ノ子	芋, 青葱(ネブカ)
22. 上奈良	蚕養, 糸真綿	8. 馬場	千切干割干, 松, 蘿蔔(ダイコン)	23. 丹羽	蘆葩(ダイコン)・款苳(フキ)→下小田井市
23. 島宮	苳, 大豆, 木綿, 竹, イカキ→名古屋・遠江・三河・西美濃・北伊勢(関水口), 蚕養, 糸真綿	9. 井ノ口	西瓜, 菜園物→下小田井市	24. 青塚	芋・蘆葩(ダイコン)・切干
24. 時之島	茶, 桑, 苳, 大豆, 蚕飼, 繭→岐阜・関竹→東野村(竹細工), 茶→稲葉宿	10. 下津	麦小物, 菜園物(午券・西瓜・胡蘿蔔)→下小田井市	25. 下切	人夫稼, 漁業
25. 瀬部	苳, 大豆, 竹細工→名古屋・知多郡, 蚕飼, 糸繭→濃州関	11. 赤池	菜園物(午券・胡蘿蔔)→下小田井市	26. 勝幡	小商, 往還人夫稼ぎ
26. 東野	竹細工→名古屋本町, 呉服商(12,13戸)→海東(津島)・海西・三河(池鯉鮒), 蚕養, 糸	12. 子生和	繰綿商い→一宮	27. 今	灰問屋あり, 灰→南野村・岐阜長良付近
27. 古知野	茶, 桑, 苳, 大豆	13. 陸田	繰綿商い→一宮	28. 須成	灰問屋あり(2戸)
28. 高屋	蚕養	14. 次郎丸	繰綿仲買→一宮	29. 桂	松杉苗, 百両金(コウジ)
29. 北高屋	茶, 桑, 蚕養, 繭	15. 小池正明寺	繰綿商い(2戸)		
	蚕養, 繭	16. 稲葉	木綿→名古屋木綿問屋・下小田井市, 置郵稼		
		17. 島	茶		
		18. 於保	繰綿商い→妙興寺・一宮		

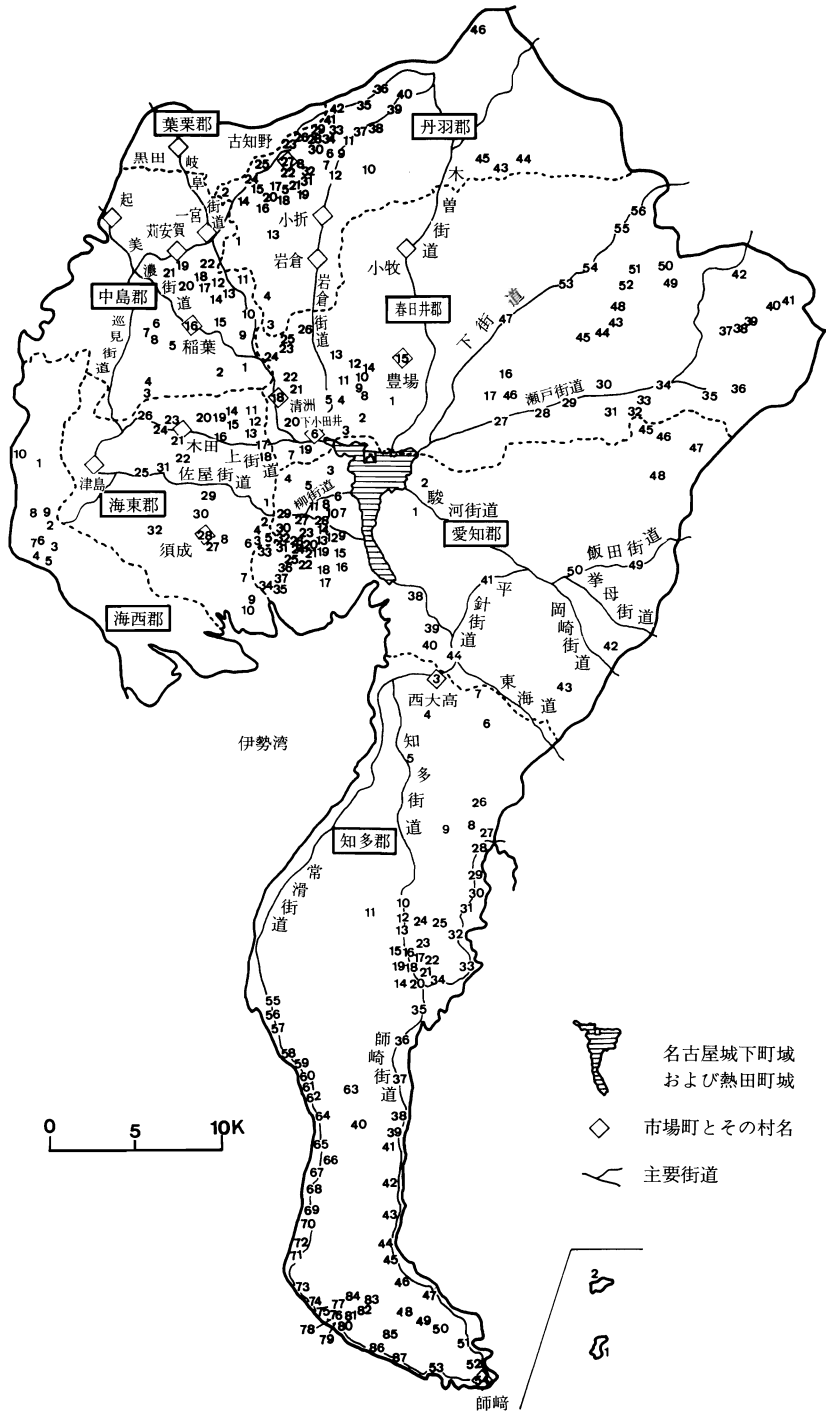
第1表 (その3)

30. 小家	手篋編み		屨, 麦小物, 盆大豆	51. 大井	魚家30戸, 魚→亀崎
31. 北神守	置郵稼 (往還稼ぎ)		, 田麦		・熱田, 煎海鼠(イリマコ)→熱州西条
32. 百町	蠟燭	24. 福住	黒鍛稼, 麦小物, 盆大豆	52. 片名	牛飼糞
<b>海西郡</b>		25. 板山	黒鍛稼, 酒屋の踏碓	53. 須佐	薪運送
1. 戸倉	鳥魚獲	26. 大符	屨, 麦小物, 盆大豆	54. 師崎	漁業, 酒屋3戸, 酒
2. 山路	鳥魚獲, 日履稼	27. 村木	黒鍛稼, 酒造家2戸		→勢州・志州・紀州
3. 上古川	普請人足, 日履稼	28. 緒川	黒鍛稼, 塩商		諸国回船あり, 鶴鳥
4. 船頭平	黒鍛稼	29. 石浜	酒造家4戸		師3人, 油矢戸, 油
5. 松田	漁業 (水災年)		黒鍛稼, 大工3人,		→勢州・三州, 芋・
6. 鯉ヶ平	漁業		樽屋3戸, 酒屋1戸 (庄屋)	55. 多屋	黒鍛稼, 酒屋1戸,
7. 富安	漁業	30. 生路	塩屋6戸, 塩→名古屋		薪 (紀州よ熊野浦より
8. 田尻	漁業		塩・桑名		運送)→名古屋, 松
9. 小茂井	日履稼	31. 藤江	黒鍛稼, 工匠3人,		葉→常滑, 運漕業,
10. 葛木	魚鳥獲 (水災年)→津島		酒造家2戸, 塩屋15戸, 塩→名古屋・津島・桑名	56. 北条	素麵屋1戸, 鍛冶屋1戸
<b>知多郡</b>		32. 有脇	酒家10戸, 酒→江戸 (回船は高浜・大浜酒と積合で三州回船利用), 灰間屋2戸		瓶細工, 甕焼90戸, 甕→名古屋・美濃・三河・遠江・伊勢・志摩・播州赤穂 (製塩用), 酒屋2戸,
1. 篠島	漁業	33. 亀崎	魚家半分, 酒造家25戸, 酒→江戸, 魚→熱田間屋	57. 瀬木	酒→江戸・伊勢, 運送業
2. 日間賀島	漁業	34. 乙川	酒屋7戸, 酒→江戸		薪・甕積運漕, 常滑焼
3. 西大高	農商兼業	35. 半田	酒造家25戸, 酒・酢・焼酎→江戸, 黒鍛稼, 江戸回船造営	58. 常滑	船稼, 酒屋2戸, 酒→江戸, 味噌屋1戸
4. 木ノ山	有松絞, 木綿, 秩父縮緬絞, 塩依編, 奥大豆	36. 成岩	船稼, 酒造家5戸, 酒→江戸, 塩浜稼		味噌→勢州, 油屋3戸, 油→江戸, 魚→
5. 富田	麦, 小物, 木綿, 蕎麦, 菜, 大根, 大豆	37. 長尾	黒鍛稼, 大工3人,		熱田・四日市, 黒鍛稼→山城・近江, 瓦
6. 桶狭間	有松絞木綿, 黒鍛稼, 麦, 小物, 木綿, 煙草, 大豆	38. 大足	酒造家3戸, 酒→勢州		→名古屋, 麦, 小物
7. 有松村新田	絞木綿, 縮緬絞	39. 東大高	黒鍛稼, 大工10人, 桶屋6-7戸, 鍛冶屋	59. 樽水	木綿, 大豆
8. 猪伏	盆大豆, 奥大豆, 木綿	40. 市原	黒鍛稼	60. 西阿野	黒鍛稼, 酒屋3戸, 酒→江戸, 麦, 小物
9. 半月	黒鍛稼	41. 富貴	黒鍛稼, 薪積船 (内海・野間・熊野) 水主履		大豆
10. 白沢	黒鍛稼	42. 布土	黒鍛稼, 大工35人, 回船業 (三河の吉田・刈谷へ商品運送)	61. 熊野	薪→勢州, 黒鍛稼
11. 草木	黒鍛稼, 茶, 田麦, 麦小物, 盆大豆	43. 上岐志	黒鍛稼, 酒造家2戸	62. 古場	黒鍛稼, 酒屋1戸, 酒→勢州
12. 坂部	黒鍛稼, 酒屋の踏碓履	44. 北方	黒鍛稼,	63. 菊屋	黒鍛稼
13. 卯之山	黒鍛稼, 麦, 小物, 大根, 蕎麦	45. 河和	酒造家5戸, 回船業	64. 松原	干大根→東浦・西浦, 田麦1分, 菜種2分, 大豆
14. 稗之宮	黒鍛稼, 酒造の米舂履	46. 古布	干鯰・松葉・柴類商人あり, 大工30人,	65. 大谷	黒鍛稼→河内, 酒→江戸, 冶工3人→三河
15. 矢口	柴・薪→近村, 柿→周辺の酒屋, 黒鍛稼	47. 矢梨	黒鍛稼, 大工25人, 水主20人→京都・江戸		酒屋3戸, 黒鍛稼
16. 高岡	黒鍛稼	48. 切山	大工25人→三河・美濃, 麦, 稗, 粟, 盆	66. 小鈴ヶ谷	黒鍛稼
17. 角岡	黒鍛稼	49. 乙方	大豆, 薪→上村	67. 広目	酒屋3戸, 黒鍛稼,
18. 大古根	黒鍛稼, 瓦師→信州	50. 山田	芋, 人蔘, 午莠	68. 坂井	蕨→成岩村
19. 植	黒鍛稼, 瓦師→信州		蜜柑, 茶	69. 上野間	黒鍛稼, 酒屋7戸, 酒→江戸, 干大根→紀州熊野・瓦師8人, 瓦→名古屋・勢州
20. 岩滑	黒鍛稼, 大工25人, 木挽7人, 桶師5人,				
21. 横松	黒鍛稼, 大工20人→半田・乙川・亀崎・三河				
22. 萩	黒鍛稼, 酒屋の踏碓履				
23. 宮津	黒鍛稼, 酒屋の踏碓履				

近世後期尾張における農民的商品生産・流通と農間余業

第1表 (その4)

70. 北奥田	黒鉄稼, 小物・木綿・蕎麦・菜大根・大根→紀州熊野	76. 吹越	酒屋1戸, 酒→江戸, 運漕業あり	82. 名切	酒屋1戸, 酒→江戸, 油屋1戸・菓子屋1戸→地売り, 松葉→常滑村
71. 南奥田	黒鉄稼, 酒屋2戸, 麦小物, 木綿, 蕎麦, 大豆	77. 中ノ郷	酒屋1戸, 鍛工4戸, 水油屋2戸, 油→勢州・三河	83. 楠	甘藷→名古屋, 松葉→常滑村
72. 柿並	黒鉄稼, 運漕業(赤穂塩・酒の江戸積)	78. 馬場	味噌屋1戸, 酒屋1戸, 酒→江戸, 黒鉄稼	84. 内福寺	薪→西端・東端・古布・三州
73. 一色	運漕業(塩・薪), 積塩船10艘→播磨・安芸・阿波・伊予, 積薪船→紀州熊野・新鹿二木・志摩ささらうち, 鱈漁, 黒鉄稼	79. 西端	運漕業, 漁業, 酒屋1戸, 酒→江戸	85. 岩屋寺	薪→古布村芝間屋
74. 小野浦	回船業	80. 東端	運漕業(江戸回船2艘), 酒屋1戸, 酒→江戸, 水油屋1戸, 油→名古屋・三州, 菓子屋3戸, 菓子→三州	86. 久	薪(熊野浦より運漕), 薪・松葉→常滑村, 田麦3町, 麦, 小物, 大豆, 木綿, 胡麻, 甘藷2町
75. 岡部	田麦3分, 麦, 粟, 稗, 大豆, 黒鉄稼	81. 利屋	甘藷→名古屋, 薪・松葉→東端・西端・常滑村	87. 大泊	運漕業



第1図 関係村の分布と主要街道

注) 郡毎に付した番号は第1表の村名番号に対応、主要街道名については『角川日本地名大辞典 23 愛知県』(角川書店、pp.2060-2061を参照した。

### 3 農産品及び農産加工品の分布と流通

第2図に示したように、尾張における商品生産としての農産品生産及びそれをもととした農産加工品生産は、著しく西部の沖積平野部に片寄って分布している。まず名古屋城下町の西部から北西部にかけて広く分布する蘭草・蕈生産地帯についてみる。おおむねこの地域は庄内川流域に位置する村々である。水田を中心とするまさに尾張の穀倉地帯であるが、本地域はその西部の海東郡や海西郡の諸地域ほどには低湿ではなく、冬季の水田裏作として蘭草生産が可能であった地域である。蘭苗は畑で育てたものが最も良いとされ、さらに蘭田は日当たりが良く、灌排水の便が良く、土質は重粘な埴土がよいと言う。その点海東郡や海西郡は、低湿地が多く蘭草の栽培には適していなかった。さてこの地域で生産された蘭草は、多くの場合村内で蕈や畳表・ござに加工されて名古屋城下西部に隣接する禰宜町や日置村の間屋に販売された。第5図に示した禰宜町や日置村に集まる線は、ほとんど蘭草・蕈関係製品である。

第2の商品としては、名古屋城下町西部と海西郡北部を中心に広くみられる瓜類生産地帯の分布である。瓜類といっても中身は多様で、南瓜・西瓜・東瓜・白瓜・菜瓜・青瓜・真桑瓜・茄子等がみられる。いわゆる今日の果菜類に含まれるものであるので、果菜類生産地帯と言っても良いであろう。なかでも海東郡の上條瓜は家康への献上品として駿府へ運ばれ、後には江戸へと献上された物である<sup>(3)</sup>。また清須村の真桑瓜も清須瓜と称された。

第3の商品としては、野菜類があげられる。第2図では、慈姑・午莠・大根・甘藷・胡蘿蔔・芋・蔓菁等の根菜類及び葱・款冬等の葉茎菜類の他、大豆・荳等を一括して野菜類として分類した。したがって野菜類もその中身は極めて多様である。野菜類の分布地帯の特色は、おおむね自然堤防卓越地帯に当たっていると言う点である。つまり畑作卓越地帯であると言っても良からう。従来の諸研究では青物生産地帯と呼ばれた地帯である。これらの野菜類生産地帯は、瓜類生産地帯と同様、下小田井市と密接に結びついていると言う点が注目される(第5図)。下小田井市(後の枇杷島市場)は、名古屋城下の中心からほぼ北西約4kmに位置し、美濃路が庄内川と交差する枇杷島橋の西詰めに設けられた市である。文化年間においてその集荷圏は23か国にも及び「万物問屋」と言われるようにあらゆる商品を取り扱っていたと言う。しかし商品の主な物は食料品であり、なかでも野菜類の取引が中心であった<sup>(4)</sup>。市の起源について詳細は不明であるが、名古屋城下への野菜類の供給の円滑化を目的として、城下成立と前後して成立したと見られる。これらの野菜類生産地帯の周辺には、豊場・稲葉・木田・須成等の六斎市が分布するにもかかわらず、多くの村々が下小田井市に商品を送っている背景には、特に青物に関する下小田井市に対する藩の特権的保護があったためである。

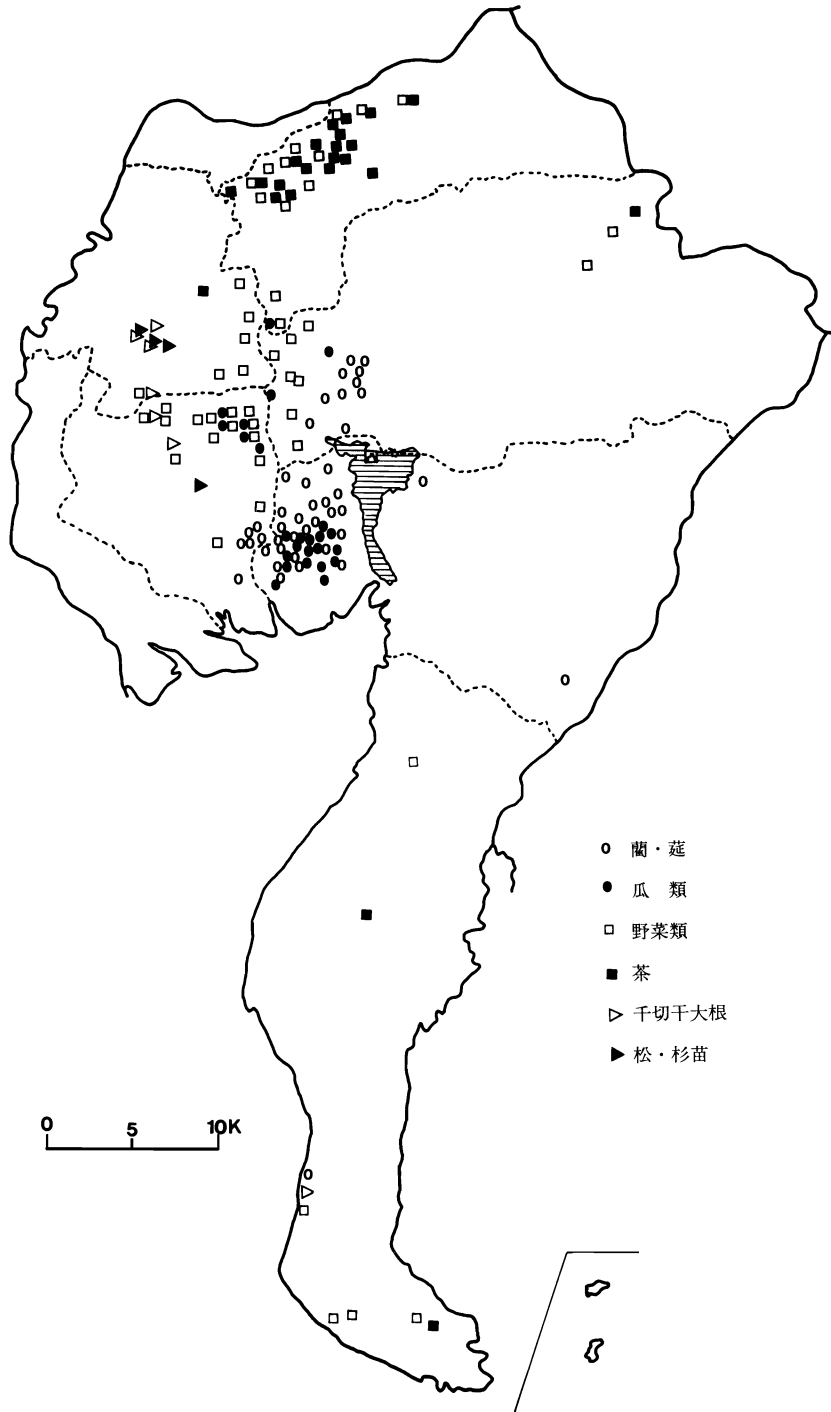
第4の商品としては、茶がある。茶の生産は、丹羽郡を中心とする犬山扇状地に見られる。当地域は扇状地であるため水はけも良く、茶の栽培には適していたことがその原因である。水田が少ない分、当地域ではこのような商品生産が発達する要因があったと言える。茶の出荷先について判明するのは、丹羽郡では丹羽村と時之島村のみで、いずれも稲葉宿へと送られている(第5図)。

第5の商品として、千切干大根生産地帯がある。この地帯は一宮の南部から稲葉宿周辺に当たる。生大根の生産地帯は下小田井市に近い地帯であるが、この大根切干生産地帯は

ややその外縁部に当たっている。尾張の大根と言えば宮重大根が有名で、この大根こそが尾張大根切干の原料であった。尾張地方の冬の気候は大根切干の製造に極めて適している。それは伊吹おろしと言われる比較的乾燥した北西風が卓越するため、大根切干は1～2日にして十分に乾燥させることができるという。また降水量の少なさも一因をなしている<sup>(5)</sup>。この大根切干は天保15年（1844）以来藩の奨励により他領売出がなされるほどに発展をしていた。これらの地帯においては「畑勝、殊ニ薄地ニ付、生綿杯一向生立兼候付、大根多分作り立、切干ニ仕立うり払、右代銀を以、御年貢物年内御上納並ニ勝手入用等之手当ニ仕候<sup>(6)</sup>」とあるように、大根切干の生産は重要な商品生産となっていたのである。ただ野菜類が下小田井市で生産者と商人との相対で取り引きされたのに対し、大根切干は在郷商人によって集荷されたようである。切干は野菜類に比較して日持ちがし比較的保存のきく商品であるために、他領移出がなされたのであろう。

第6の商品は、稲葉宿周辺にみられた松・杉等の苗を生産する地帯である。今日でも稲沢周辺は植木の苗を盛んに生産しているが、既に江戸期にはその基礎が見られる。その中心地は矢合村辺りで、苗は、美濃・三河・伊勢など隣国にまで移出されている。





第2図 農産品及び農産加工品の分布

#### 4 各種製造業と流通

第3図に示した諸業種の分布も、第2図と同様かなり偏在している。

第1の業種として陶器生産業がある。文政年間(1818-29)瀬戸方面における窯数と窯稼人は、瀬戸村でそれぞれ31窯・157人、赤津村でそれぞれ12窯・31人となっていた。陶業はこの頃には東濃地帯にまで広く拡散している<sup>(7)</sup>。もう一つの陶業地として知多の常滑がある。常滑焼きは常滑周辺4ヵ村において生産されたが、製品は、大甕・小甕・鉢皿・壺・酒器・茶器等であった。播磨国赤穂の塩たれ甕は北条村において焼かれ、製塩用に用いられた<sup>(8)</sup>。

第2に製塩業についてみる。尾張地域における製塩業は愛知郡南部の星崎地域と知多半島基部東岸の東浦地域にみられる。星崎塩田とは、南野・荒井・牛毛・戸部・本地・笠寺・山崎の各村の総称である。これはかつてこの辺りが星崎庄と呼ばれていたことに由来し、江戸初期には塩浜が百町歩余りもあったという。星崎の塩は本州前浜塩と称し、白塩にして名産であったという<sup>(9)</sup>。しかし第3図にも示したように18世紀の後半の寛政期には、塩浜は戸部・本地・笠寺の3村だけとなり、面積は総計で12町歩程度と減少した。つまり江戸の初めからすると約150年間に塩浜は8分の1に減ったことになる。このような塩田衰退の直接の原因は、塩田が新田として開発されていったためである。塩浜の新田化は、例えば本地村では既に慶安元年(1648)に塩浜の新田開発が実施されており、星崎の塩田は17世紀後半から18世紀前半にかけて急速に衰退していったことが伺われる。塩田の新田化の原因は丁度この時期に全国の塩の約9割を生産したと言われる瀬戸内の塩(十州塩)が、当地方にも盛んに流入して当地方の塩の生産・販路を圧迫したことが考えられる。知多東浦地方の塩田は古く8世紀において生産の記録がみられる。明治12年(1879)においては、生産量は多くはないものの尾張の塩の全てを知多郡において生産しており、かなり遅くまで製塩業は継続されたようである。

第3に履物類製造業についてみる。これらは春日井郡東部の丘陵地帯の村々に集中して認められる。履物類の内容は草鞋・草履である。特に大森村の草鞋は大森草鞋として有名であったという。この付近は多治見を中継地とする信濃と名古屋とを結ぶ地方道に沿った地域であり、そのため第4図にも示したように駄賃稼ぎが盛んであり、荷物輸送に携わる人々が多かったと考えられる。そのため彼らの履物としてこれらの草鞋や草履の生産が普及したのではないかと考えられる。このように当時の特産品生産には、地元産業の副産物的要素として登場し、やがて特産品化するといったものがかなり存在したのではなかろうか。おそらくこの大森草鞋も地元の自給品的要素から発展したものと解される。

第4に木綿関係製品の生産地帯が、中島郡東部から丹羽郡西部にかけてみられる。これらは一宮をとりまく尾張を代表する綿作・綿業地帯である。その多くが繰綿・木綿の生産と販売を行っている村々である。『徇行記』の中島郡西部の巻があれば、おそらくこれら木綿関係の村の分布が増えたであろうと思われる。丹羽郡の中部にみられるものは、宮後村と下野村に該当するが、両村はいずれも菅大臣縞の生産を行っている。菅大臣縞は天明期(1781-88)に京都の西洞院から美濃に伝播し、18世紀末には美濃を中心に尾張北部地域にも急速に普及していった<sup>(10)</sup>。木綿関係製品のもう一つの生産地域として知多郡北部の数ヵ村をあげることができる。これらは、木ノ山・桶狭間・有松村新田の3村で、いずれも有松

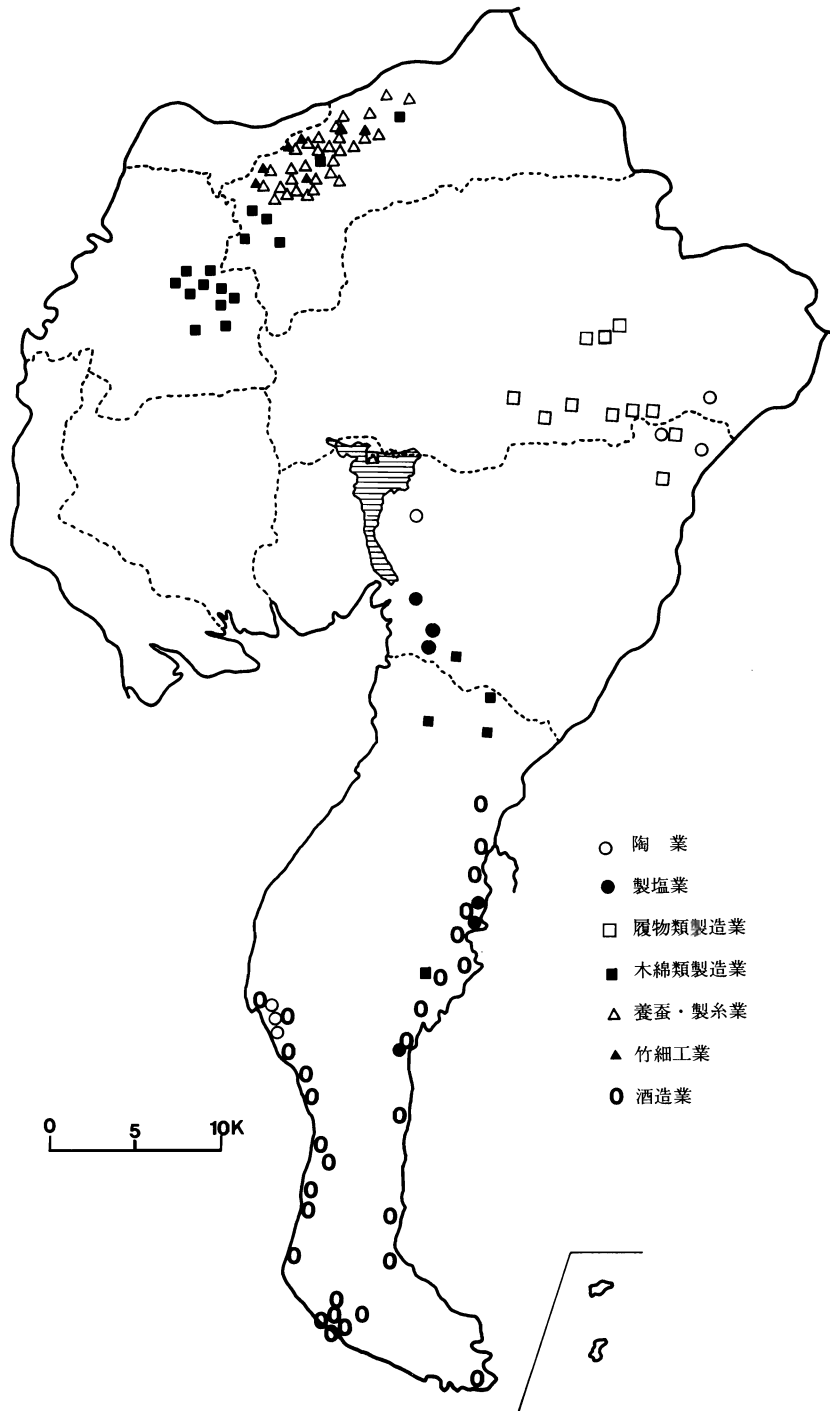
絞の生産を行う村々である。これらの村々は丘陵地帯に位置し、劣悪な耕地条件下において村人の重要な収入源として江戸初期より営まれたもので、東海道沿いの有松や鳴海において旅客相手の土産商品として人気のあったものである。ここにも交通と地元産業との関わりをみることができる。

第5の業種としては、養蚕・製糸関係業がある。ほとんどが丹羽郡の犬山扇状地帯に当たっている。また第2図に示した茶の生産地帯ともほぼ重なっている。これは桑が、果樹・茶と同様深根性の樹木作物であり、生理的には泥湿の土地は不適で、排水性に富む地域が適地であったからである。またさらに膨張した根が、土壌流亡・侵食をくい止める効果があったことから、一般的に傾斜地での栽培が多くみられた<sup>(11)</sup>。尾張、美濃地域が養蚕地帯として成立したのは、かなり古く鎌倉時代にまで遡ることができる。しかも当時ここを中心とする東海地域は絹の大産地でもあった。鎌倉期においては、『海道記』が記すように、津島付近も養蚕が盛んであって<sup>(12)</sup>、かなり広い範囲が養蚕地帯となっていたことが推測される。しかし江戸期においては、養蚕地帯はここ犬山扇状地帯に局限されるようになっていく。近世に入り大衆衣料としての木綿の普及にともなって絹製品の生産は衰退した。丹羽郡の村々の記事では、桑・蚕飼（蚕養）のほか、繭・糸真綿を製するとあり、絹織物業の存在は認められないようである。おそらく丹羽郡の一带では、美濃・尾西地域で文政期(1818-29)頃に移植された結城鳴生産の一原料としての絹糸の生産を行っていたのではないかと考えられる。

第6に竹細工業が丹羽郡の一部にみられる。これらは、島宮・時之島・瀬部・東野・赤童子・和田勝佐・斎藤の7ヵ村であるが、後の3村は竹細工は寛文年中(1661-72)のこととしており、『徇行記』の時代においては生産が行われていなかったようである。具体的には荷い狭箱、下地籠、商品を詰める皮籠の生産であった。当地方では木曾川の御困堤がなかった頃は河水が氾濫し、耕地に砂礫が流入し砂地が多く水田化が困難であったこと、砂地や礫の多い未墾地には竹木が繁茂していたので竹細工の竹や藤蔓を得やすかったことと、農耕のみでは生活が困難であったために、農閑期の副業として竹細工が営まれたと言う<sup>(13)</sup>。このような起源に関する事情は近江国高島郡の扇骨生産で有名な安曇川三角州地帯と酷似している<sup>(14)</sup>。竹籠の別名を瀬部と呼んだのは、瀬部村の竹細工が有名であったことによる。一宮周辺では先述のように木綿や繭綿の販売が盛んに行われたため、商人は竹籠に繰綿や繭などを入れて運んだことであろう。そのためこの地域の竹細工業には、そのような業種との関係が存在するのかもしれない。

最後に酒造業の分布を見る。酒造業は全て知多郡に限られている。本図では、村内に酒造家が1軒でもあれば酒造業の村として分類したため、必ずしも全てが酒造を中心とする村というわけではない。尾張藩では元禄10年(1697)に酒株制度が布かれ、藩でも名古屋における米価下落の防止策として知多郡の酒造に多額の援助を行ったりしてその発達を助成したと言う。天明期(1781-88)頃より次第に江戸送りが盛んとなり知多の酒造業は飛躍的發展を遂げた。このような酒造業発展の原因としては、海上交通の便の良さが挙げられる。同時に巨額の資金を必要とする産業だけに、回船業を営む資産家の存在もまたその一因とされている。もちろん気候や水質などの自然条件においても恵まれていたことは言うまでもない。さらに地元労働力として周辺農村の余剰労働力の存在もあった。第1表の知多郡の坂部村・稗之宮・萩村・宮津村などの記事において酒屋の米舂・踏碓雇がみられるこ

とは、その辺りの事情をよく示している。政策的な面からは藩による奨励保護がある。尾張藩では、酒株制度を設け、業者を特許しこれに対して資金の融通、原料米の配給、海運に対する保護、港湾改修などを行っている<sup>(15)</sup>。また酒造業と関連して石浜村や東大高村において樽や桶の製造がみられるのも注意されよう。第5図において知多半島から諸村と江戸を結ぶ多くの線は酒の輸出を示している。そのほか酒は伊勢・志摩・紀伊などにも運漕されてはいるが、その中心的移出先は圧倒的に江戸である。



第3図 各種製造業の分布

## 5 その他の産業と出稼ぎ先

第4図は、その他の産業と農間余業について示したものである。

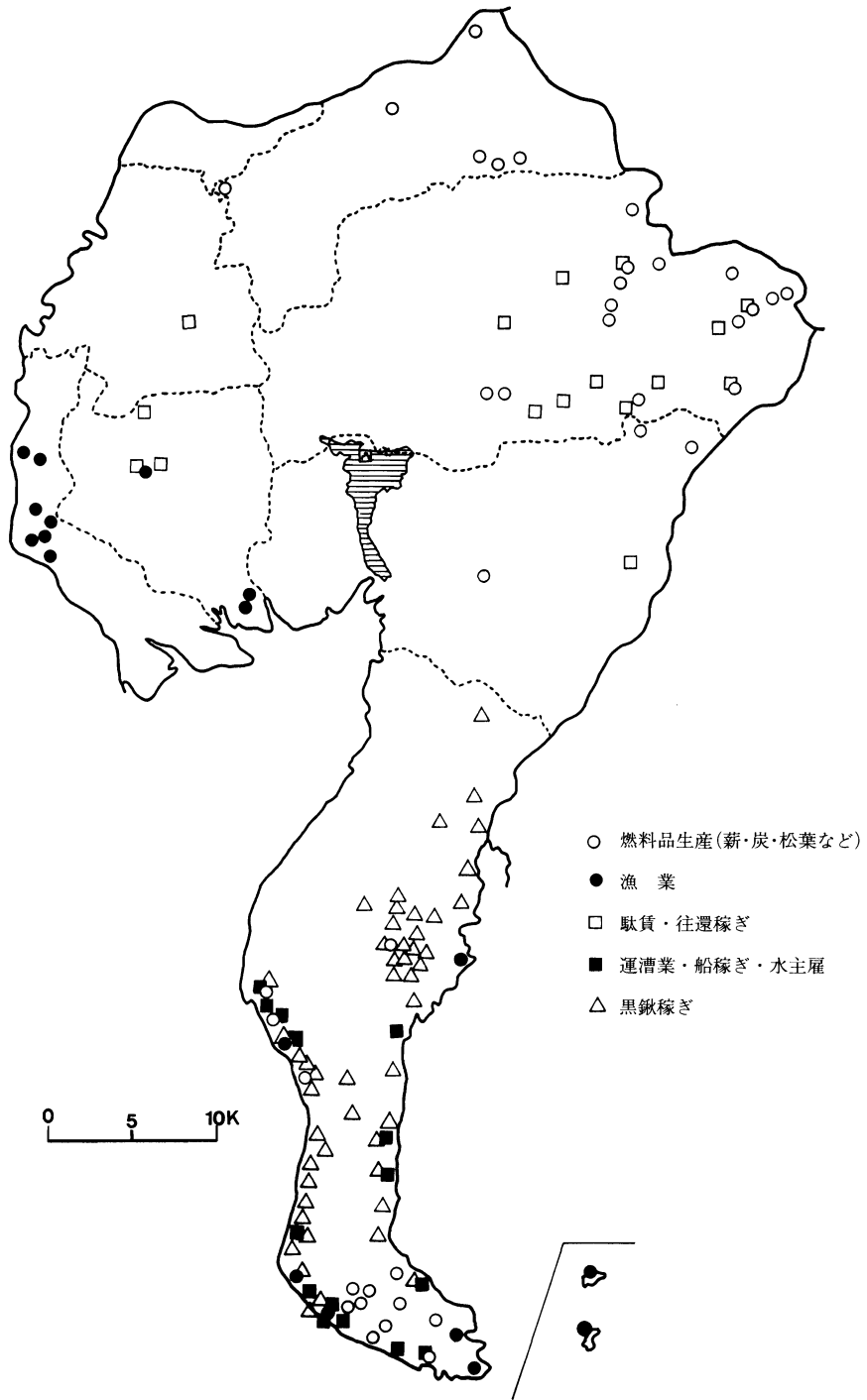
第1に春日井郡から丹羽郡にかけてみられる薪や炭などといった燃料生産についてみる。この付近の村々のほとんどが名古屋へ薪を出荷しており、名古屋城下にとって本地域は燃料供給基地であったと言えよう。これら諸村はいずれも下街道(勝川一内津一多治見)や瀬戸街道・水野街道あるいは木曾街道(小牧街道)などの名古屋と尾張東部丘陵地帯を結ぶ諸街道沿いに立地している。この尾張東部丘陵地帯は名古屋城下町の発達とともに燃料供給基地としての性格を強め、山林の伐採がすすんだため、18世紀の半ばにはかなりの山林荒廃が発生していたようである<sup>(16)</sup>。これに対し知多半島南部に主としてみられる薪などの生産地帯は、常滑焼の燃料供給地としての性格を持っていた。常滑周辺の村々はもとより南部の利屋・名切・楠などの村々も常滑へ薪や松葉を販売している。また村によっては遠く伊勢・志摩さらに紀伊などとの間で薪を輸送したりするなど、一色村のように薪積船のみみられる村もあった。

第2に漁業であるが、海西郡に少しまとまってみられるのと知多半島の中南部にもみられる。海西郡については「烏魚獲」となっており、水辺の立地から水鳥や魚を漁獲したものである。村によっては水災年に限って漁獲を行ったとあることからこれらがある程度臨時的に行われる可能性を持っていたものと解釈される。海東郡南部の2例は鰻漁を行っている。蟹江の鰻は名産でもあった<sup>(17)</sup>。知多郡の漁業の中心は鰻漁であったと思われる。さらに魚油は鰻を原料とするものであった<sup>(18)</sup>。魚の出荷先は熱田問屋や四日市となっている。『尾張名所図絵』は熱田の魚市の賑わいを伝えている<sup>(19)</sup>。

第3の駄賃稼ぎ・往還稼ぎについては先にも少し触れたが、春日井郡東部一帯に盛んである。信濃と名古屋を結ぶ街道沿いの村々であったこと、瀬戸の陶器や薪などの林産物の輸送などがこれらの村の人々に余業を提供したことであろう。海東郡の3例は佐屋街道や上街道に沿う村々であった。

第4に海運に関わる運漕業・舟稼ぎは、知多郡に限られる。特に一色・柿並・小野浦付近の野間の回船は塩船と呼ばれ瀬戸内の塩を江戸や大阪へ運び、それよりやや南部に位置する岡部・吹越から内福寺辺りにかけての内海の回船は御城米を各地へ運んだ<sup>(20)</sup>。その他常滑の陶器や干鰯・酒・油・木材・薪類などを各地で仕入れたりあるいは売却するなどして極めて広範囲にわたって営業活動を繰り広げた。それらは既存の菱垣回船や樽回船の活動にも少なからぬ影響を及ぼすほどに発展をしていた。知多半島は尾張の中でも陸上交通の点では近接性に劣るためこのような回船業が発達をみたのである。

最後に知多半島部に顕著にみられる黒鍬稼ぎについてみる。なかでも知多街道の南部にあたる阿久比谷付近と知多半島南西海岸部に集中がみられる。彼らは冬の農閑期を利用して尾張・三河の近辺の新田開発や土木工事に出かけたばかりでなく、遠江・駿河・美濃をはじめ河内・山城・近江など畿内地域へも出稼ぎに行った。『徇行記』に記される知多郡103カ村中、49カ村が黒鍬稼ぎを出しておりその比率は47.6%に達している。知多半島には灌漑用の溜池が多く溜池を作る土木技術をもって出稼ぎをする者が多かったと言われる<sup>(21)</sup>。黒鍬を輩出した村々は酒造業の他にはみるべき産業もなかったことがその特徴と言えよう。



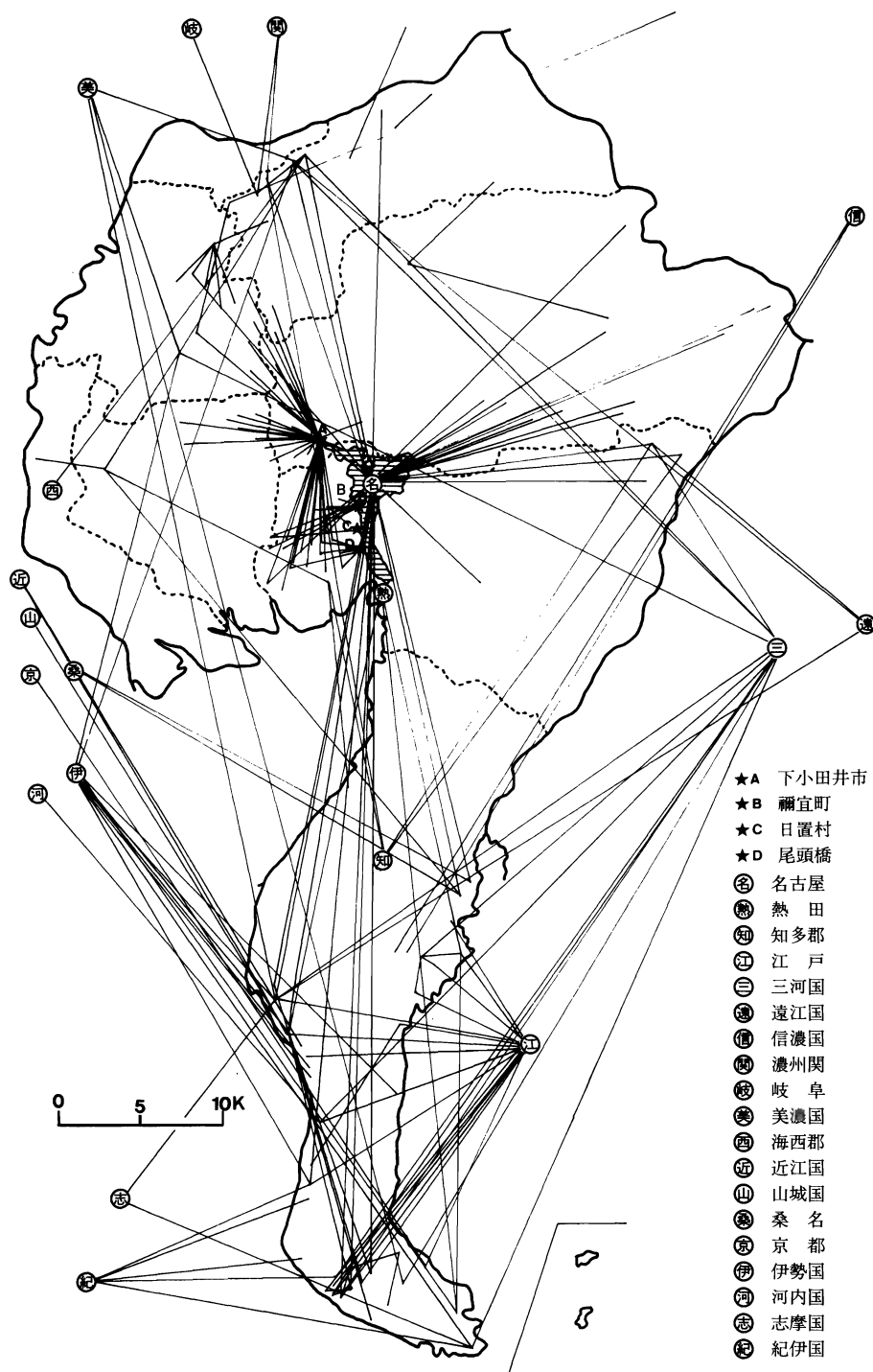
第4図 その他の産業と農間余業

## 6 諸商品の出荷先及び出稼ぎ先に関する地域的特色

第5図は、第1表に示した各村の特産品の出荷先や出稼ぎ先の判明するものについて関係地域を線で結んだものである。煩雑になるので個々の品名や出稼ぎ労働の種類などは省略した。またいくつかの特産品についてはその販路などについて前述した。ここでは、尾張全体をみた場合の地域的結びつきという視点から図を分析してみたい。名古屋は、藩領域経済圏の中枢に位置するだけあって藩内各地から線が集まっている。名古屋城下町縁辺部に位置する下小田井市、禰宜町、日置村、尾頭橋なども名古屋城下町機能の一部と見なしているので、商品流通という点で名実ともに名古屋は尾張の中心であったと言えよう。尾張北部では一宮や古知野といった六斎市にもいくつかの線が集中している。

ところが知多半島においてはかなり様子が異なっている。これには『徇行記』の記載の様式の差異にもよるところがあるかも知れないが、知多半島では、海運によって実に遠隔の地との交易・交流が認められる。知多郡を除く他の諸郡が概ね陸続きの隣接した地方との交易を中心としているのに対して、知多半島では東は江戸、西は近畿さらには播州付近にまでその関係地を有している。このような遠隔地間の交易は海運なしには存在しなかったであろうことが、この例から十分に理解されよう。その点では知多はかなり独自の流通販売形態を有していたと言えよう。それは木綿の流通においても尾張国内は知多を除く七郡と知多郡とに二分されるなど知多は独自の立場にあった。





第5図 諸商品の出荷及び出稼ぎの地域関係

## 7 お わ り に

1800年前後の尾張地域における産業や農民的諸商品生産の分布や流通先、さらには農民的出稼ぎや非農的雇用の様子について、尾張藩の優れた地誌書である『徇行記』を用いて考察した。その結果この時期には尾張各地において明らかに地方的特産品と呼びうるものが成長していたことが裏付けられた。またこれらの諸産業がその地域の他産業との関連において誕生しあるいは成長していったことも推測された。そしてあるものは近代にさらには現代にまで引き継がれているものも多く、いわゆる伝統産業の由来を江戸期に多く求めることができそうである。さらに流通の面からみるとそれらの多くが国内諸市場において取り引きされていたことも判明した。ただ知多半島はやや特異で、その海運業の存在が知多に遠隔地間交易を可能ならしめた最大の要因とというるであろう。

(平成5年9月1日受理)

### 注

- (1) 『尾張徇行記』、名古屋市教育委員会編(1964-69)：『名古屋叢書 続編』第4-8巻所収
- (2) 梶川勇作(1980)：「尾張丹羽郡の藩政村の土地条件」、『人文地理』、第32巻第6号、pp.78-87。  
梶川勇作(1981・82)：「尾張春日井郡の藩政村の構成(前編)・(後編)」、『金城学院大学論集(社会科学篇)』23号、pp.1-31、同24号、pp.1-31。  
梶川勇作(1984・85)：「尾張西南部の近世村落の土地条件(前編)・(後編)」、『金沢大学文学部論集(史学科篇)』第4号、pp.87-115、同第5号、pp.1-19。  
梶川勇作(1989)：「尾張知多郡の近世村の土地条件」、『金沢大学文学部論集(史学科篇)』、第9号、pp.1-41。
- (3) 深田正韶(1969)：『尾張志(下)』、歴史図書社、pp.578-579。
- (4) 小島広次(1962)：「枇杷島市場と藩役人一特権の擁護をめぐって」、『地方史研究』56・57号、pp.79-92。
- (5) 愛知県実業教育振興会(1942)：『愛知県特殊産業の由来(下巻)』、三益社、pp.447-464。
- (6) 前掲4)
- (7) 辻本芳郎(1978)：『日本の在来工業』、大明堂、pp.148-170。
- (8) 深田正韶(1969)：『尾張志(上)』、歴史図書社、p.762。
- (9) 加賀宣勝(1971)：『星崎の塩』、79p。
- (10) 林英夫(1958)：「尾濃綿織物地帯における商品流通の展開」、『歴史学研究』219号、pp.11-19。
- (11) 大迫輝通(1975)：『桑と繭』、古今書院、p.67。
- (12) 大山喬平(1978)：『日本中世農村史の研究』、岩波書店、pp.320-364。
- (13) 前掲5)、pp.135-155。
- (14) 小林博(1985)：「扇骨の安曇川」、板倉勝高編『地場産業の町3』所収、古今書院、pp.145-156。
- (15) 前掲5)、pp.4-13。
- (16) 伊藤章子(1992)：「尾張東部丘陵地帯における近世の山林荒廃」、『地理学報告』第75号、pp.19-32
- (17) 前掲3)、p.580。
- (18) 前掲8)、p.772。
- (19) 小田切春江(1844)：『尾張名所図絵 前編四』、「熱田の浜、夕上りの魚市」の図。同書によれば、「年中朝市夕市とて一日に二度づつ市をなせり、億兆の魚介をここに湊へて国産の漁魚ハもとより近国遠国よりも船積にて運送し」とある。
- (20) 森原章・吉永昭(1982)：『愛知 史蹟郷土史』、講談社、pp.134-135。
- (21) 前掲20)、p.115。